

『次第禪門』における禅観と禅法について

——九次第定・師子奮迅三昧・超越三昧を手掛かりとして——

武 藤 明 範

序 論

智顛（五三八―五九七）は『摩訶止観』において、天台の禅法・止観思想の終極を、四種三昧、二十五方便、十境・十乘観法の円頓止観として体系づけた。これは、従来中国で実践されてきた種々の修行法を『大智度論』などを基にして、大小、偏円、相待・絶待という観点から仏教の修行法を集大成し、天台の実践法門として総括している。

智顛が前期時代（四十七歳・五八四年以前）に講述したものと¹して、『次第禪門』『六妙法門』『天台小止観』などを挙げる²ことができる。これらの書名を見ても、ほとんどが禅観や禅法³に関するものであり、智顛がいかに生涯一貫

『次第禪門』における禅観と禅法について（武藤）

して、修行実践を重視していたかが分かる。

このうち最初期の講述である『次第禪門』は、晩年の『摩訶止観』に結実する天台の禅法・止観思想の成立過程を考察する上で重要な著述であると共に、インド伝来の実践法門を、「禅」の一字に統括し、浅深次第の範疇に分別して体系化しているという点で、他に類例を見ないものである⁴。

筆者はこの数年間、愛知学院大学大学院の大野栄人教授の講義に参加して『次第禪門』を輪読し、天台の禅法・止観思想の成立を研究している⁴。この原典研究に参加して感じることは、『次第禪門』に説く四禅や四無量心などは、『大品般若経』や『大智度論』などで説く禅観や禅法を縦

『次第禪門』における禪觀と禪法について（武藤）

横に駆使し、智顛が自らの説を主張していることである。

『次第禪門』に説く禪觀や禪法の内容を論じたものに、先学の優れた研究があり、多くの教授を受けている。⁵⁾しかし、これらの研究は『次第禪門』に説く、全ての禪觀や禪法の内容について考察したものではなく、一部の禪觀や禪法に限定して論究したものである。また、それらの禪觀や禪法が、智顛以前や智顛当時の中国仏教界でどのように実践されていたのかや、天台の禪法・止觀思想の形成に、直接的または間接的に与えている影響までは論究されることは少ない。⁶⁾

本論では、『次第禪門』記載の全ての禪觀や禪法を取り上げて考察するのは、紙幅の都合上難しいので、『次第禪門』巻第一之下の「弁禪波羅蜜門詮次第四」の「無漏禪次第之相」の一部に説く禪觀や禪法に限定して、そこに説く禪觀や禪法の内容を検討する。具体的には、『次第禪門』や『法界次第初門』などを基にして、智顛が説く禪觀や禪法の意味を明らかにすることにしたい。

本論 弁禪波羅蜜門詮次第四の無漏禪次第之相にみる れる禪觀と禪法について

『次第禪門』第四章である「禪波羅蜜の詮次を弁ず」は、菩薩の修行者が、禪波羅蜜を実践するために、浅い段階から深い段階へと修行法の順序を選び定めて、正しい修行の筋道を明らかにすることを目的として説かれた章である。本章の冒頭部分には、

禪定の次第を弁ずるに、すなわち二意となす。一には、正しく諸禪の次第を明かす。二には、非次第を簡ぶなり。⁷⁾

とあって、智顛はインド伝来の小乗や大乘の禪觀や禪法について、第一は浅い段階から深い段階へ徐々に進むことを明らかにする「諸禪の次第」と、第二は禪定の修行法そのものが悟りそのものに直結する「諸禪の非次第」とに大別する。

このうち智顛は、諸禪の次第を「有漏法」「亦有漏亦無漏禪」「無漏禪次第之相」「菩薩不共次第」の四種に分類して、インド伝来の修行法を明らかにしている。具体的にい

えば、三界を超えて仏界に至るために煩惱を対治する「有漏法」には、四禪・四無量心・四無色定から成る十二門禪を配当し、煩惱を対治する「亦有漏亦無漏禪」には、六妙門・十六特勝・四念処・通明觀を配当し、煩惱の習気を対治する「無漏禪次第之相」には、修行法の浅深の階梯を体系的に位置づける「行行次第」と、三乗のそれぞれが実践する修行法の浅深の階梯を体系的に位置づける「慧行次第」とに分けて説き、菩薩のみが実践する「菩薩不共次第」には、自性禪・一切禪・難禪・一切門禪・善人禪・一切行禪・除惱禪・此世他世衆禪・清淨淨禪を配当する。^⑧

なかでも無漏禪次第之相に説く禪觀や禪法は非常に多く、智顛は「行行次第」を觀・鍊・薰・修に四句分別して、觀禪に九想・八念・十想・八背捨・八勝處・十一一切・六神通を配当し、鍊禪に九次第定・有覺有觀などの三昧を配当し、薰禪に師子奮迅三昧を配当し、修禪に超越三昧を配当し、「慧行次第」では、声聞の三昧として三十七品・三解脱門・四諦・十六行を配当し、辟支仏の三昧は十二因縁を配当し、菩薩の三昧は、自性禪・八背捨・九次第定・師子奮迅三昧・超越三昧を配当する。

『次第禪門』における禪觀と禪法について（武藤）

本論では、これら全ての禪觀や禪法の内容について一言及せずに、前述した大野教授の講義に参加して筆者が調べて手応えのあった、無漏禪次第之相にみられる禪觀や禪法のうち、練禪の九次第定と薰禪の師子奮迅三昧と修禪の超越三昧とを中心に論究する。^⑨

第一節 練禪と九次第定について

「行行次第」の項では、次の引用文のように、九次第定と有覺有觀などの三三昧を練禪に配当する。すなわち、次に、練禪を明かさば、すなわちこれ九次第定なり。（中略）および有覺有觀等の三三昧も、みなこれ練禪の摂なり。^⑩

いまは、「練禪」と「九次第定」のそれぞれの内容に注目する。練禪は、鍊禪とも表記するが、『望月佛教大辞典』には、「觀・鍊・薰・修」から成る四種禪の説明と関連して、練禪を次のように記す。

練禪とは、無漏禪をもつて諸の有漏味禪を練し、その滓穢を除きて、みな清淨ならしむること、なお鍊金術の法のごとくなるをいう。九次第定のごときこれな

『次第禪門』における禪觀と禪法について（武藤）

り。ただし阿毘曇熏禪の法も、また無漏をもつて有漏を練すといえども、かれはただ四禪を練するのみにして、無色界に及ばず。いまは初禪よりないし非想（非非想処定）ことごとくみなこれを練し、一切諸禪をして清淨調柔にして功德を増益せしむるを果となす。¹¹⁾

また『広説仏教語辞典』には、練禪を次のように記す。

練禪は練禪とも書く。觀・練・熏・修の四種禪の第二。四禪・四無色定・滅尽定の九次第定をいう。¹²⁾

このように両辞書ともに、練禪は、觀・練・熏・修の四種禪のうちの第二禪であり、具体的には九次第定が練禪であると記している。

本節では、練禪の内容を検討するにあたって、智顛の前期時代における教学の基になった『大智度論』では、練禪をどのように説いているかと、『大智度論』の文を受けて智顛は、自らの著述で練禪をどのように定義しているか、の二面から考察する。

『大智度論』には、練禪という用語は一箇所に説くのみである。

四禪の中に練法あり。無漏をもつて有漏を練るが故

に。四禪に心、自在なることを得。よく無漏の第四禪をもつて、有漏の第四禪を練り、しかる後に第三（禪）・第二（禪）・第一禪はみな自地の無漏をもつて、自地の有漏を練る。

問うていわく。何をもつて練禪と名づくるや。

答えていわく。諸の聖人は、無漏定を樂しみ、有漏（定）を樂しません。欲を離れる時、淨有漏を樂しませんして自得し、今はその滓穢を除かんと欲するが故に、無漏をもつてこれを練る。喩えば、金を練つてその穢を去るがごとし。無漏もて有漏を練るもまたまたかくのごとし。無漏禪より起りて、淨禪に入り、かくのごとくしばしばす。これを名づけて練るとなす。¹³⁾

とあつて、色界に生じる四段階の禪定である四禪のうち、第四禪から始まり初禪に至るまでに、それぞれの無漏の禪を用いて、有漏の禪を練り上げていく修行法を、「練禪」ないし「練法」と規定している。

後述するが、智顛は自らの著述において、「練禪」と「九次第定」という、そもそも別の概念であつた両者を結びつけて、「練禪は九次第定である」という説を展開する

が、『大智度論』で「九次第定」を述べている部分を検討すれば、

九次第定とは初禅の心より起こって、次第に第二禅に入り、余心をして入ることを得せしめず。もしくは善、もしくは垢なり。かくのごとくしてすなわち滅受想定に至る¹⁴。

とあるように、『大智度論』では、九次第定を通仏教的な解釈である、四禅・四空処定・滅受想定から成る九種類の禅定として捉えており、練禅とは結びつけていない。

次に智顛は、「練禅」ないし「九次第定」をどのように説いているか検討する。

智顛の著述では、鍊禅や九次第定の用例が多いため、ここでは練禅と九次第定とが、同じ文章中に登場する五つの事例に絞って、両者の関係を考察する。

第一に、『次第禅門』巻第一下には、

次に、練禅を明かさば、すなわちこれ九次第定なり¹⁵。

とあって、練禅を具体的に述べれば、九次第定と同じ概念であると説いている。

第二に、『次第禅門』巻第十では、九次第定の説明を、

『次第禅門』における禅観と禅法について（武藤）

積名と次位と修証の三種類から述べるが、このうち積名の項で、九次第定と練禅との関係を次のように説く。

九次第定を積するに、すなわち三意となす。一には名を積す。二には次位を積す。三には修証を明かす。第一に名を明かす。いまはこの九法は、みな転じて次第定と名づくるは、上来の諸の法門は、すでに觀行はいまだ熟さざれば、禅に入るときに心に間あり。ゆえに次第定と名づくるなり。行者は、定觀の法は、先にすでに成就すれば、いまこのなかに修練し、すでに熟してよく一禅心を起こし、次に一禅に入つて心は間なく、異念をして入ることを得せしめず。もしは善、もしは垢、かくのごとくないし滅受想定に入る。これを九次第定と名づく。または練禅と名づく。所以はいかん。諸の仏弟子は、心に無漏を樂みて、先に諸の味禅を得。今はその滓穢を除かんと欲して、無漏禅をもつてこれを練り、みな清浄ならしむるは、鍊金の法のごとし。

問うていわく。九次第定を説くなかの練法と、阿毘曇の人の熏禅を明かす法と何らの異なりかあるをやと。

『次第禪門』における禪觀と禪法について（武藤）

答えていわく。同あり、異あり。かれは無漏をもつて有漏を練る。いままた無漏をもつて有漏を練る。ゆえに同あり。かれはすなわちただ四禪を練り、退転を防ぐために純を転じて利となす。現法樂および五淨居に生ずるを明かすがゆえに、ただ四禪を練る。無色界はすなわち練法なし。いまは、初禪ないし非想（非非想処定）ことごとくみなこれを練りて、一切の諸禪をして清淨に調柔して功德を増益せしむることを明かす。ゆえに異なりとなすなり。¹⁶⁾

とあって、先の『大智度論』の鍊金術の例えを引用しながら、智顛は新たに九次第定が練禪と同じ概念であると規定している。

第三に、『六妙法門』では、数息・隨息・止・觀・還・淨から成る六妙門に、インド伝来の修行法を分類する中で、九次第定と練禪について次のように説く。

四に觀を妙門となすは、行者、修觀によるがゆえに。すなわちよく九想・八念・十想・八背捨・八勝處・十一切處・九次第定・獅子奮迅三昧・超越三昧・練禪・十四變化心・三明・六通および八解脫を出生し、滅受

想を得、すなわち涅槃に入る。觀を妙門となすの意ここにあり。¹⁷⁾

とあって、九次第定と練禪を別個に説いており、両者は同じ概念ではないとある。

第四に、天台教団の中で辞書的役割を担った『法界次第初門』には、「九次第定」の項を設けているが、そこには「練禪」の用語はない。また、九次第定と類似した修行内容である「通明禪」は、阿羅漢以上の聖者が、四禪と四無色定と滅尽定から成る修行法を実践するが、『法界次第初門』の「通明禪」の項でも、練禪と通明觀との関係は説いていない。

『法界次第初門』で唯一「練禪」を説くのは、「六波羅蜜」の項で、禪波羅蜜を世間禪と出世間禪と出世間上上禪の三種に分類して説くところである。

禪に二種あり。一には世間禪。二には出世間禪なり。（中略）出世間禪とは、また二種あり。一には出世間禪。二には出世間上上禪なり。出世間禪とは、いわく六妙門・十六特勝・通明・九想・八念・十想・八背捨・八勝處・十一切處・練禪・十四變化・願智頂禪・

無諍三昧・三三昧・師子奮迅(三昧)・超越三昧ないし三明六通かくのごとき等の禅は、みなこれ出世間禅なり。または二乗の共禅と名づく。⁽²⁰⁾

とあって、練禅を出世間禅の一つに分類している。

第五に、『法華玄義』巻第四上には、出世間禅を観・練・薰・修の四種禅のうち、薰禅に練禅を当てはめて説く中で、練禅は九次第定であるとして次のように説く。

二に出世間禅を明かさば、すなわち四種あり。観・練・熏・修をいう。(中略)練禅とは、すなわち九次第定なり。上来、八禅を得るといえども、入るにはすなわち有間なり。いまは純熟して初めの浅きより、極めて後の深きに至らしめんと欲して、次第して入り、中間に垢滓間穢あることなく、不次第の者をして次第ならしむ。故に次第と名づく。またこれ無漏もて有漏を練り、もろもろの間穢を除くがゆえに、練禅と名づく。またこれ均しく諸禅を調べ、定慧をして齊平にして無間ならしむるなり。『阿毘曇』に熏・練を明かすに、ただ無漏をもつて四禅に熏ずるといふのみ。いまは無漏をもつて通じて八地を練る。すなわちこれ次第

『次第禅門』における禅観と禅法について(武藤)

に無間三昧に入るなり。⁽²¹⁾

とあって、第二の『次第禅門』と同様に、練禅は九次第定であるという。また『阿毘曇』でも薰禅と練禅を説くが、『阿毘曇』では無漏禅によって四禅を薰じるのみであるが、天台が目指す練禅は、無漏禅によって八地を練りあげていき、順序次第に無間三昧に入ることを目指すと説いている。なお、『法華玄義』でいう八禅ないし八地について、智顛は述べておらずその意味は不明である。しかし、湛然(七一―七八二)の『法華玄義釈籤』によれば、八禅ないし八地は、根本味禅・六妙門・十六特勝・通明禅・九想・八背捨・八勝処・十一切勝の八種であるという。以上、五つの事例を考察したが、整理すると次の①～④となる。

①『六妙法門』では、練禅と九次第定は別の概念として捉えていた。しかし、

②『次第禅門』と『法華玄義』では、智顛は『大智度論』に説く「練禅」という用語を踏襲した上で、練禅は九次第定と同じ概念であると新たに規定した。

③『法界次第初門』は、練禅は九次第定とは別に、出世

『次第禪門』における禪觀と禪法について（武藤）

間禪の一つとして説いた。従って、

④『六妙法門』では、練禪と九次第定は別の概念として捉えているが、『次第禪門』と『法華玄義』では、練禪と九次第定は同じ概念として説いている。つまり智顛は、『大智度論』の「練禪」という用語を基にして、練禪は九次第定と同じ概念であると創出したと考えることができる。

しかも智顛の最初期の著述である『次第禪門』に始まり、晩年の『法華玄義』にも説いていることを考え合わせると、大蘇山（河南省商城県）の慧思（五一五―五七七）のもとで『大品般若経』と『大智度論』を学び、師と別れた後に、建康（江蘇省南京）の瓦官寺で『大智度論』と『次第禪門』を講説した智顛にとって、『大智度論』で抽象的に説く「練禪」を、いかに中国に伝来した数多ある修行法と結びつけて説くかが、テーマの一つになっていたと推測することができる。

また、智顛の著述に練禪と九次第定を結びつけて説く場合と、別概念として説く場合との矛盾についてであるが、現存する智顛の著述の多くは、智顛自身が著わしたものは

少なく、智顛の講説を灌頂（五六―一六三）らが、筆録して編纂したものが大部分であるため、齟齬をきたすのはいたしかたないと考えられる。

第二節 薰禪の師子奮迅三昧と修禪の超越三昧について

『次第禪門』では、練禪に続いて左の引用文のように、薰禪は師子奮迅三昧と同義であり、修禪は超越三昧と同義であるという。すなわち、

次に、薰禪を明かす。薰禪は、すなわちこれ師子奮迅三昧なり。順・逆の次第に入・出し、諸禪を薰じて、定と觀とを分明に純熟し、功德を増益せしむるがゆえなり。次に、修禪を明かさば、修禪はすなわちこれ超越三昧なり。諸禪のなかにおいて、超越して入・出し、無礙自在に解脱を得んがためのゆえなり。²³

とある。本節では、薰禪と師子奮迅三昧との関連と、修禪と超越三昧との関連について検討する。

第一は、薰禪である。

觀・練・薰・修の四種禪のうち第三禪である薰禪は、熏禪ともいうが、仏教諸経論には、薰禪が師子奮迅三昧と同

義であるという記述はない。

左の引用文のように、『次第禪門』巻第十では薫禪については述べていないが、師子奮迅三昧は、九次第定を基本にするという。具体的には、九次第定の最下位の禪定である初禪から始まり第二禪へ、階段を一段ずつ登るように実践し、最上位である滅受想定まで実践する。続いて、最上位の滅受想定から始まり最下位の初禪までを、階段を一段ずつ降りるように実践するという。しかし、九次第定との大きな相違は、師子奮迅三昧に通達すると、牛革から様々な物ができるように、物事に精通し変幻自在な姿を開顕できるといふ。すなわち、

次に、師子奮迅三昧を釈す。いま師子奮迅三昧を明かさば、『般若経』の中に説くがごとし。行者は、九次第定によりて、師子奮迅三昧に入る。

いかにが師子奮迅三昧と名づくや。欲を離れ、不善法を離れ、有覺有観、離生喜樂して初禪に入る。かくのごとく次第して、二禪、三禪、四禪、空処、識処、不用処、非有想非無想処に入り、滅受想定に入る。滅受想定より起ちて、還りて非有想非無想処に入り、非有

『次第禪門』における禪觀と禪法について（武藤）

想非無想処より起ちて、還りて不用処に入る。かくのごとく次第に、還りて識処に入り、空処に入り、四禪に入り、三禪に入り、二禪に入り、初禪に入る。これを師子奮迅三昧と名づくるなり。譬えば、師子の奮迅のときは、ただよく前に進みて奮迅して去るのみにあらず。またよく却行するにも奮迅して帰るがごとし。一切の諸獸の能わざるところなり。しかるに、行者がこの（師子奮迅三昧）法門に入るも、またまたかくのごとし。ただよく心に次第して、初禪より直ちに滅受（想定）に至るのみにあらず。またよく滅受想定より却りて非想に入り、入りて初禪に至る。これすなわち、義は師子の奮迅するに同じ。上来の諸禪の能わざるところなり。しかるがゆえに、この定を説いて師子奮迅三昧となす。行者は、この法門に住すれば、すなわちよく覆却して遍く一切の諸禪に入る。諸の觀や定を薫じてことごとく通利ならしめ、轉變自在にして諸の深三昧や種種の功德を出生し、神智はうたた勝れば、また薫禪と名づく。譬えば、牛革を薫熟すれば、意に随つて諸の世物を作すがごとし。これもまたかく

『次第禪門』における禪觀と禪法について（武藤）

のごとし。次位を分別するは、これ九（次第）定に同じ。²⁵

とあって、『大品般若経』を引用して、師子奮迅三昧は九次第定の実践であると説いている。この師子奮迅三昧について、智顛が参照したと考えられる『大品般若経』巻第二十に、

この菩薩は、八背捨・九次第定に依りて、師子奮迅三昧に入る。云何が師子奮迅三昧と名づくるや。須菩提よ、菩薩は欲を離れ、悪不善の法を離れ、有覚有觀、離生喜樂、初禪に入り、ないし滅受想定に入る。滅受想定より起ち、ないしかえつて初禪に入る。この菩薩は、師子奮迅三昧によって、超越三昧に入る。²⁶

とある。九次第定を順觀と逆觀に実践することが、師子奮迅三昧であると説いているが、『大品般若経』には、薰禪という用語そのものはない。

また智顛は、『法界次第初門』巻中之上の「師子奮迅三昧」の項では、右の『大品般若経』に基づいて、師子奮迅三昧と九次第定との關係を述べており、更に、師子奮迅三昧には、師子奮迅入三昧と、師子奮迅出三昧の二つがある

と説いている。しかし当該箇所には、薰禪の用語はなく、師子奮迅三昧が薰禪であるとは述べていない。従つて、智顛は『大品般若経』の師子奮迅三昧の記述を参照して、薰禪という概念を創出したと推測できる。

第二は、修禪と超越三昧との関連である。

本節の冒頭でみたように、智顛は、觀・練・薰・修のうち最高位である修禪は、超越三昧と同じ概念であると説いた。超越三昧は頂禪などともいうが、仏教諸経論には、超越三昧が修禪と同義であるとは述べていない。

『法界次第初門』の「超越三昧」の項では、次の引用文のように超越三昧を、超人三昧と超出三昧に区分して説くが、四禪・四空処定・滅受想定から成る「九次第定」の一々の段階を一气呵成に飛び越えて、初禪から滅受想定へ入ったり、第二禪から滅受想定へ入ったり、逆に、滅受想定から心の落ち着かない散心へ入ったり、非有想非無想定から散心へ入ったりと、自由自在に禪定の段階を往来するという。すなわち、

師子奮迅三昧に次いで、超越（三昧）を弁ずるは、『大品経』に仏は自ら誠言す。菩薩は師子奮迅三昧に

依りて超越三昧に入ると。(中略) いかんが超入三昧と名づくや。諸の欲・悪・不善の法を離れ、有覚有

観、離生喜樂の初禪に入る。初禪より起ちて非有想非無想処に超入し、非有想非無想処より起ちて、滅受想定に入る。滅受想定より起ちて還りて初禪に入る。初禪より起ちて滅受想定に入る。滅受想定より起ちて二禪に入る。二禪より起ちて滅受想定に入る。(中略)

いかんが超出三昧と名づくや。滅受想定より散心の中に入り、散心の中より滅受想定に入る。滅受想定より起ちて還りて散心の中に住す。散心の中より起ちて非有想非無想処に入り、非有想非無想処より起ちて散心の中に住す。散心の中より起ちて無所有処に入り、無所有処より起ちて散心の中に住す。(中略) 散心の中より起ちて初禪に入り、初禪より起ちて散心の中に入る。⁽²⁸⁾

とある。これは、五五二、六キロメートルある東京駅と新大阪駅の間を、約二時間三十分で結ぶ東海道新幹線の「のぞみ」号が、名古屋や京都などの主要駅しか停車しないように、超越三昧は、九次第定を構成する一々の段階につい

『次第禪門』における禪觀と禪法について (武藤)

て、途中の段階を通過して、禪定の各段階を行き来することができるといふ。

智顛が『法界次第初門』を説く際に、参照したと考えられる文が、『大品般若經』にある。

この菩薩は、師子奮迅三昧に依つて、超越三昧に入る。いかんが超越三昧となすや。須菩提よ、菩薩は欲を離れ、諸悪・不善法を離れ、有覚有観、離生喜樂、初禪に入り、初禪より起ちてないし非有想非無想処に入り、非有想非無想処を起ちて滅受想定に入り、滅受想定を起ちて還つて初禪に入る。初禪を起ちて滅受想定に入り、滅受想定を起ちて(第)二禪に入る。(第)二禪を起ちて滅受想定に入り、滅受想定を起ちて(第)三禪に入る。(中略) 散心の中を起ちて滅受想定に入り、滅受想定を起ちて還つて散心の中に入る。散心の中を起ちて非有想非無想処(定)に入り、非有想非無想処(定)を起ちて還つて散心の中に住す。散心の中を起ちて無所有処(定)に入り、無所有処(定)を起ちて散心の中に住す。散心の中を起ちて識処(定)に入り、識処(定)を起ちて散心の中に住す。

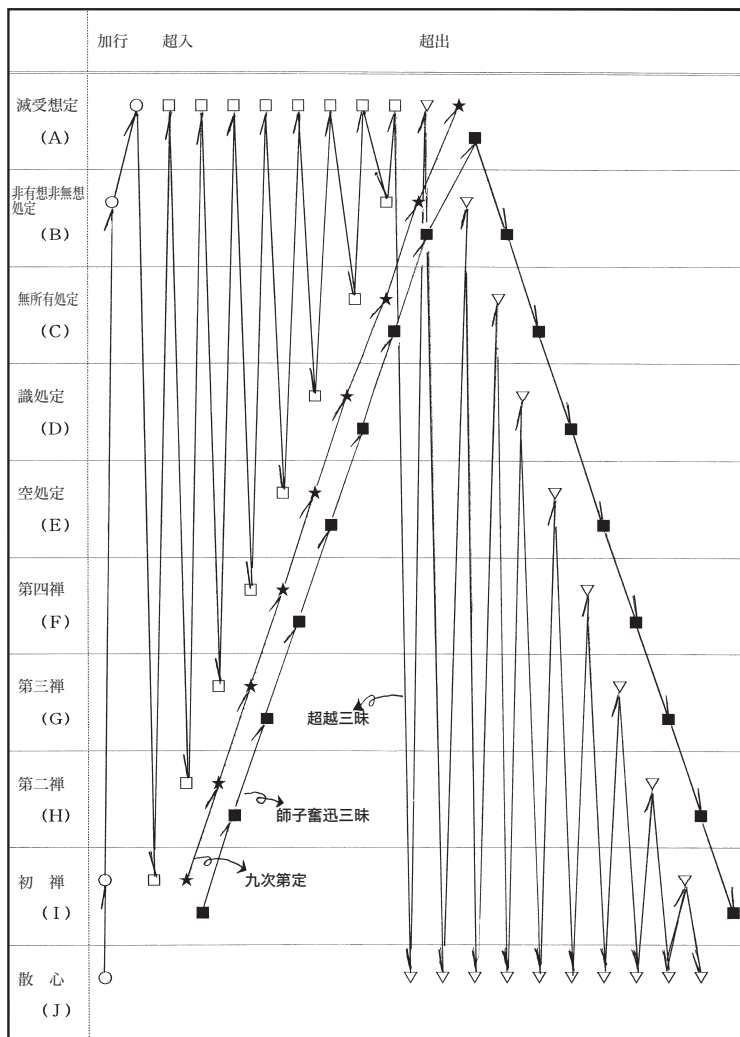


図1 九次第定（★で表示）と師子奮迅三昧（■で表示）と超越三昧（○□▽で表示）との関連

散心の中を起ちて空処(定)に入り、空処(定)を起ちて散心の中に住す。散心の中を起ちて第四禪の中に入り、第四禪の中を起ちて散心の中に住す。散心の中を起ちて第三禪の中に入り、第三禪の中を起ちて散心の中に住す。散心の中を起ちて第二禪の中に入り、第二禪の中を起ちて散心の中に住す。散心の中を起ちて初禪の中に入り、初禪の中を起ちて散心の中に住す。

この菩薩摩訶薩は、超越三昧に住して、諸法の等相を得。これを菩薩の般若波羅蜜に住して、禪那波羅蜜を取るとなす。⁽²⁸⁾

とある。

前述のように、智顛は『法界次第初門』において、超越三昧を「超入」と「超出」に分類して説くが、このうち初禪から滅受想定へと上がっていくのを「超入」といい、滅受想定から散心へと下がっていくのを「超出」と規定している。

いまは、本論で考察した『次第禪門』や『法界次第初門』に説く、「練禪の九次第定」と「薰禪の師子奮迅三昧」と「修禪の超越三昧」のそれぞれの禪定の動きを図式

『次第禪門』における禪觀と禪法について(武藤)

化すれば、右頁の「図一」のようになる。

結論

以上、本論では無漏禪次第之相にみられる禪觀や禪法のうち、練禪と九次第定、薰禪と師子奮迅三昧、修禪と超越三昧に限定して、そこに説く禪觀や禪法の内容を考察した。

本論の考察によって確認されたことをまとめれば、次の(a)~(c)となる。

(a) 練禪と九次第定は同義であり、薰禪と師子奮迅三昧は同義であり、修禪と超越三昧は同義であると説く仏教諸經論はなかった。従って、これらの関係を築いたのは、智顛の独創であると確認できる。

(b) 『大智度論』では、色界に生じる四段階の禪定である四禪のうち、第四禪から始まり初禪に至るまでに、それぞれの無漏の禪を用いて、有漏の禪を練り上げていく修行法を、「練禪」と称していた。しかし智顛は、『大智度論』の用語を踏襲しながらも、練禪は九次第定と同義であると新たに規定した。

③この九次第定は、その後の薰禪や修禪で説く、師子奮迅三昧や超越三昧と大きく関係するものであった。そもそも九次第定は、四禪・四空処定・滅受想定から成る九種類の禪定が、智慧が深まることによつて、初禪から第二禪へ、第二禪から第三禪へと始まり、非有想非無想定から滅受想定に至るといふ、禪定のレベルを浅から深へと順序次第に進み入ることであつた。

④智顛はこの九次第定を、師子奮迅三昧と超越三昧に応用して次のように説いた。すなわち師子奮迅三昧では、九次第定の一々について、初禪から第二禪へ、第二禪から第三禪へと、順番通り実践したり、また逆に、滅受想定から非有想非無想定へ、非有想非無想定から無処有処定へと、禪定の浅深のレベルを一段階ずつ下げる修行法であると規定した。また超越三昧では、「超入」と「超出」を二分して次のように説く。すなわち、散心から九次第定の最下位である初禪に入った後、上位から第二位の非有想非無想定に入り、非有想非無想定から滅受想定へ入り、その後初禪に還る。続いて、初禪から滅受想定へ入り、滅受想定から第二禪へ還り、第二禪から滅受想定へ入り、滅受想定

から第三禪へ還るといふように、修行者が今、実践している禪定のレベルから、最終的に目標とする、滅受想定まで、一気呵成に飛び越えて入りながら、九次第定の階位を一段ずつ上げていく禪定をいふ。これが「超入」のあり様である。「超出」では、普通、九次第定を実践する場合は、最上位の滅受想定から始まり最下位の初禪までを、階段を一段ずつ降りるように実践するが、超越三昧の場合には、滅受想定から、禪定に入る以前の段階で心が落ち着いていない散心へ、非有想非無想定から散心へと、一気呵成に出ることができるといふ。このように智顛は、九次第定を基にしながらも、新たな概念を創出したのである。

⑤佐藤哲英氏が指摘するように、智顛の『維摩經文疏』には、滅尽定に入るには通明觀・八背捨・九次第定・師子奮迅三昧・超越三昧の五種があり、このうち觀・練・薰・修の四禪は『大品般若經』に典拠があり、これらを修行法として体系化したのは慧思だと、述べている。また『唐高僧伝』によれば、現存しないが慧思には『次第禪要』という著作があつたといふ。これらの記述から、本論で考察した練禪と九次第定の関係や、薰禪と師子奮迅三昧の関係

や、修禪と超越三昧との関係は、慧思の思想的影響がある
と考えることができる。

しかし、本論で検討したように、薫禪と師子奮迅三昧
や、修禪と超越三昧には、『大品般若経』の影響がみられ
たが、練禪と九次第定の関係では、『大智度論』の練禪と
いう用語を基にして、智顛が新たに形成した概念であつ
た。また慧思が、『大智度論』で説く諸法門を禪波羅蜜の
立場で説いた『諸法無諍三昧法門』や、他の著述には、練
禪と九次第定の関係や、薫禪と師子奮迅三昧の関係や、修
禪と超越三昧の関係などを述べている箇所はない。従つ
て、現存する慧思ないし智顛の著述から検討すると、智顛
の独創と考えるのが自然であると思われる。

注

- (1) 佐藤哲英『天台大師の研究』(一〇三—一二七頁、百華
苑、一九六一年三月)。
- (2) 大野栄人『次第禪門』の研究(一)、『愛知学院大学人
間文化研究所紀要 人間文化』第二〇号、二〇〇五年七月)
によれば、「禪觀」と「禪法」と「觀法」の定義は次のよう
になる。「禪觀」は、インド以来伝承されてきた四禪などの

『次第禪門』における禪觀と禪法について(武藤)

小乗系の修行法をいう。「禪法」は、大乘經典に至つて、新
たに説かれた法華三昧などの修行法をいう。「觀法」は、イ
ンド以来の大小乗の禪觀や禪法を総括した、智顛が独自に案
出した、「十乘觀法」などをいう。

- (3) 大野栄人『次第禪門』の研究(一)、『愛知学院大学人
間文化研究所紀要 人間文化』第二〇号、二〇〇五年七月)。
- (4) 研究成果は、大野栄人『次第禪門』の研究(八)、『愛
知学院大学禪研究所紀要』第三八号、二〇一〇年三月)など
を参照されたい。

(5) 佐藤哲英『天台大師の研究』(一一五—一二七頁、百華
苑、一九六一年三月)など。

(6) 智顛当時の禪觀実修については、拙稿『次第禪門』に
おける禪觀と禪法について—十六特勝・四念処・九想を手掛
かりとして—(『東海佛教』第五五輯、二〇一〇年三月)な
どを参照されたい。

(7) 『次第禪門』巻第二下(『大正蔵』四六・四八〇a)。

(8) 『次第禪門』巻第二下(『大正蔵』四六・四八〇a—四八
一a)。

(9) 大学院の授業に参加し、その授業の研究成果の一部の発
表を許諾いただいた大野栄人教授や伊藤光壽氏には深謝しま
す。また今回取り上げる「練禪」と「薫禪」について、仏教
諸経論では「練禪」ないし「熏禪」と表記することがある。
本論攻では、経論を引用するときは経論の表記に従うが、文

『次第禪門』における禪觀と禪法について（武藤）

章中では「練禪」または「薰禪」の表記で統一する。

- (10) 『次第禪門』卷第二下（『大正藏』四六・四八〇b）。
- (11) 望月信亨『望月佛教大辭典』第一卷（八三〇頁、世界聖典刊行協会、一九六五年一〇月）。
- (12) 中村元『広説仏教語辞典』下卷（二七五五頁、東京書籍、二〇〇一年六月）。
- (13) 『大智度論』卷第十七（『大正藏』二五・一八七b）。
- (14) 『大智度論』卷第二十一（『大正藏』二五・二二六c）。
- 『同書』卷第八十八（『大正藏』二五・六八二c）も同様である。
- (15) 『次第禪門』卷第二下（『大正藏』四六・四八〇b）。
- (16) 『次第禪門』卷第十（『大正藏』四六・五四六b―c）。
- (17) 『六妙法門』（『大正藏』四六・五四九c）。
- (18) 『法界次第初門』卷中之上（『大正藏』四六・六七八c―六七九a）。
- (19) 『法界次第初門』卷上之下（『大正藏』四六・六七四c―六七五b）。
- (20) 『法界次第初門』卷下之上（『大正藏』四六・六八七a―b）。
- (21) 『法華玄義』卷第四上（『大正藏』三三・七一九b―c）。
- (22) 『法華玄義釈籤』卷第八（『大正藏』三三・八七五a―b）。
- (23) 『智者大師別伝』及び『唐高僧伝』卷第十七（『大正

藏』五〇・一九二c、及び五六四b―c）。

- (24) 『次第禪門』卷第二下（『大正藏』四六・四八〇b）。
- (25) 『次第禪門』卷第十（『大正藏』四六・五四七c―五四八a）。
- (26) 『大品般若経』卷第二十（『大正藏』八・三六八a―b）。
- (27) 『法界次第初門』卷中之上（『大正藏』四六・六七九b―c）。
- (28) 『法界次第初門』卷中之上（『大正藏』四六・六七九c―六八〇a）。
- (29) 『大品般若経』卷第二十（『大正藏』八・三六八b―c）。
- (30) 佐藤哲英『天台大師の研究』（一二三頁、百華苑、一九六一年三月）。『維摩経文疏』卷第十八（『卍統藏』通卷二八・三二b）。「唐高僧伝」卷第十七（『大正藏』五〇・五六四a）。